

仏教学の課題

藤原了然

(一)

さきに明治中期以後に於ける仏教研究の発展は目ざましいものがあつた。その主因と考えられるものは二つ数えることが出来るであろう。第一には仏教研究法の自由刷新であり、第二には仏教原典の新資料の供与である。

まず第一の仏教研究法の刷新とは、文物一新といわれる明治維新の一環として、仏教研究法が、ヨーロッパ学風を受容することにより、歴史的、批判的、組織的な研究面に於て、従来の祖述、訓話、註釈一辺倒の仏教研究法に新風を吹き込んだということである。第二には東西文化文流の結果、梵語經典、巴利語經典、西域語經典等、従来殆んど知られることのなかつた、大部なしかも、中には現存の漢訳經典の原典的な意義を有する新資料が続々と提供されたことである。大乘仏教と小乗仏教との関係、それまでは殆んど黙殺視されて来た阿含經典への再確認等、仏教学界はその屋台骨をゆさぶられた感さえある。

(二)

これらの結果として仏教研究は異常といつていゝほどの進展をもたらした。その影響するところ教化の面に於ても嶄新、自由、生命感溢るゝものを輩動せしむるに到つた。教界起死回生

の快事と称される所以である。

しかし大勢のおもむくところ、大正末期から昭和にかけては、顕著な唯物論の盛行の所為もあるが、仏教学界自体に於て、動脈硬化の兆候を暗示するものがある。大平洋戦争による敗戦の結果は、憲法の改正をはじめとして家族制度の壊滅等々、明治維新に劣らぬ変革が続出したが、仏教学界におけるありようは、歴史的研究が目立つこと、或は表現がいわゆる戦後的になつたことの外には、さしてみるべきものがないといつては過言であらうか。信教の自由の名の下に、教団の分裂、新興宗教の乱立は顕著なるものが認められるけれども、一度、各宗の宗乗或は宗学という領域に於ては、全く旧態依然と称する外はない。強いて変革を要求するものではないが、もしそれ新生面に対して落然自失という如きであれば事は重大である。

(三)

仏教学又は宗学の分野に於て原典研究が最も基礎的要件であることはいうまでもない。又その原典に対する古徳先学の理解の跡を辿ることも極めて肝要欠くべからざることである。

しかしながら、以上のことが如何に重要であつても、このことに終始することが仏教学のすべてであると考えるが如きは当を得たものとはいえないはずである。言い古された言葉であるが、ラツキョの皮むき、死体解剖の難説を免れることは出来ない。雨後の筍の如く発表される仏教学界の出版、研究発表に於いてこの傾向が絶無と謂われえないことは遺憾というよりは、今後の宗教界特に仏教界の実情に徴して由々しき大事とも称さるべきであらうか。

温古知新はいゝやすく行いやすいことではない。よき伝統の正しき領受の上に、独断ならざるこれが現代的展開こそ仏教学三世一貫の理路であらう。速かなる本然の姿を望むや切。

同 発 善 提 心

秦 隆 真

本学五十周年記念に図書館が拡張されて、狭いながらに福祉学研究室ができた。わが宗門は大正勝代に宗教大学に社会事業研究室において矢吹教授を指導に当時日本に社会事業家の養成やのトップを切り、或は官界に或は民間（主として宗門に）に多数の社会事業従事者を送り出したのである。

爾来約四十年、教化事業や社会事業の開発に進展をつづけてきた宗門であるが、戦後余りのびないのは何であるか。

寺院及び宗門の物心両面の貧困である、否それよりも人的資源の不足である。かつて一寺院一事業の奨励で各地に教化及保育の事業がうえつけられ、又民生、更生保護関係の仕事に従事して居る宗門人のあることはせめての慰めであるが、誠に淋しい。

世は福祉国家の確立を目ざして前進して居る時、宗門人として何を以て貢献したらよいのか